

# タイトル：学生視点から考える地域課題解決型学習を通じた高大連携に関する研究

## ～九州新幹線西九州ルート諫早駅を事例に～

江頭知遼 鉄口聖（長崎ウエスレヤン大学・経済政策学科学生）

加藤久雄 登り山和希 白武義治（長崎ウエスレヤン大学・経済政策学科教員）

浦田恵子（長崎県立諫早商業高等学校教員）

Keyword：長崎県「ふるさと教育」・PBL・「高大連携（高大接続）」・九州新幹線西九州ルート・諫早ステフェス

### 【問題・目的・背景】

#### 1. 研究の背景

##### 1-1 長崎県「ふるさと教育」

長崎県では「ふるさと教育」が行われており、人口減少の克服と地域活性化を実現するためには、ふるさとに愛着と誇りを持つことが必要であると考えられている。また、地域の課題解決に向けて主体的に関わることのできる資質・能力を育み、キャリア教育やグローバル化に対応した教育を推進している。註1)

##### 1-2 PBLープロブレムベースドラーニングについて

PBL はカナダで始められた授業形態であり、批判的思考スキルやコミュニケーションスキルの促進ができると考えられている。日本では「問題基盤型学習」や「問題解決型学習」と呼ばれている。現在の日本の教育は問題を自ら見つけ出し、自らの知識を使ってそれらを解決する力が求められる。そのために、何が問題であるかを把握し、その問題に即した解決法を自ら考え出す力を育成するための学びが必要とされている。プロブレムベースドラーニングは問題解決と学びへのプロセスが重視される。一人一人が、地域に対して何が問題であるのか、どのようなプロセスを組めば解決できるのかが重要になる。註2) このように、プロブレムベースドラーニングは「ふるさと教育」において主要な学習方法になると考えている。

#### 2. 研究の目的

##### 2-1 諫早ステーションフェスティバルの目的

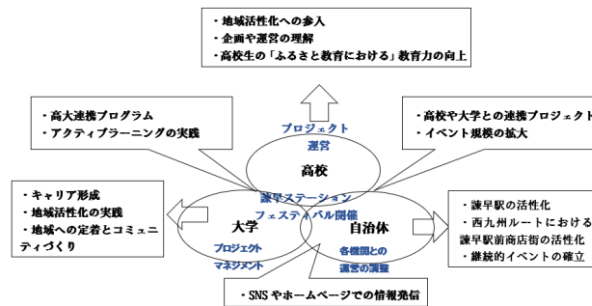
長崎県は日本列島の最西端に位置しており、人口減少と少子高齢化が深刻な問題となっている。諫早で若者を定着させるイベントを起こすためには、若者が中心となってプロジェクトを企画・運営することが必要であると考えた。また、若者が中心となりイベントを行うことで諫早駅を若者が集う場所とすることができる。そして回数を重ねることによって若者同士のコミュニティの形成や若者の諫早市への定着に繋がるのではないかと考えている。

##### 2-2 高大連携におけるプロジェクト目的

「高大連携」については高等学校教育の質の確保・向上、大学の人材育成機能の強化、能力・意欲・適性を多面的・多角的に考えることが提言されている。そのために、資質・能力の育成、学びに向かう力の向上、課題の発見・解決に向けて生徒と学生が主体的・能動的に学ぶアクティブラーニングの考え方が重要になっている。註3) 今回のプロジェクトは、大学（長崎ウエスレヤン大学）と高校（長崎県立諫早商業高等学校）の連携に基づき、互いに協働し、連携しながら一つのイベントを企画・運営していくことを「高

大連携プロジェクト」という。（諫早市役所駅周辺再開発課にも協力を得ている。）

#### 2-3 プロジェクト概念図



注) 高校：諫早商業高校商業クラブ  
大学：長崎ウエスレヤン大学  
自治体：諫早市役所

※本プロジェクトにおける高大官三者の役割についての概念図

#### 3. 諫早市や諫早駅の地域課題や問題点

##### 3-1 九州新幹線西九州ルート開業に伴う問題点

2022年に九州新幹線西九州ルートが完成し、ついに長崎県にも新幹線が開業される。西九州ルートの開業により九州内はもちろんのこと、大阪より西の主要都市との時間が大幅に短縮され、「ヒト・モノ・カネ」の流通が大いに期待されている。しかし、裏を返せば長崎から都市部へのストロー現象が起り益々、人口減少が加速する恐れがあると考えられる。

##### 3-2 諫早市や諫早駅周辺の地域課題

諫早市は県内の他の地域と比べて高齢化率は低いが確実に少子高齢化が進んでおり、若者の人口流出を止める必要がある。現状として、諫早駅構内には店舗が少なく、駅周辺の商店街も衰退傾向にあると考えられる。また、諫早市全体でも小売商店数は減少しており、これは中心市街地に関しても大幅に減少傾向にある。諫早駅周辺の大型店においても同じことがいえる。

#### 【研究方法・研究内容】

#### 4. 研究方法

①イベントの企画 ②イベントの交渉

③イベントの実践

④アンケートによるアセスメントとヒアリング  
(出演者・来場者・事前アンケート)

#### 5. 研究内容

①イベントの企画 ②イベントの交渉

③イベントの運営 ④イベントのリフレクション

#### 【研究・調査・分析結果】

#### 6. 研究

2019年6月21日に諫早ステーションフェスティバルを

開催した。イベントの企画・交渉・運営を、学生や生徒が主体となって行い、若者における問題解決型学習（PBL）を実践的にやり、若者が中心となって諫早市における地域課題の一つを解決した。今までの PBL は課題や問題点について調査することが主となっていたが今回の研究では課題について調査した後に、実際にイベントを企画・運営し、今後どのような展開が必要であるかを考え、諫早市の未来を見据えた活動ができたと考えている。

#### 7. 調査・調査対象の設定

諫早ステーションフェスティバルの趣旨は「若者が楽しめるイベントであり、それを通して諫早駅に若者が集い賑わいを創出する」というコンセプトが前提にあったため、10代から20代の若者を中心にアンケート調査を行っている。アンケートの調査母数は112人で有効回答数は60人である。

#### 8. 分析結果

表1：年代×イベントに来たいかのクロス集計

	10代	20代	合計
ぜひ来たい	5%	15%	8%
来たい	28%	25%	27%
どちらかといえば来たい	60%	55%	58%
来たくない	8%	5%	7%
合計	100%	100%	100%

表1から分かるように、ぜひ来たいと回答した人は20代の方が多く、来たい・どちらかといえば来たいと回答した人は同じぐらいだった。全体的にイベントに来たいという人が90%以上を占めている。

表2：年代×イベントについてのクロス集計

	10代	20代	合計
グルメフェス	48%	35%	43%
音楽フェス	25%	35%	28%
ショップフェス	15%	20%	17%
幼児向けイベント	0%	5%	2%
季節のイベント	13%	5%	10%
合計	100%	100%	100%

表2から分かるように、グルメフェスを開催してほしいと回答した人が多い。一方20代に注目すると音楽フェスとグルメフェスの割合的には同じである。

表3：イベント×イベントに来たいかのクロス集計

	グルメフェス	音楽フェス	合計
ぜひ来たい	0%	12%	8%
来たい	35%	29%	27%
どちらかといえば来たい	58%	59%	58%
来たくない	8%	0%	7%
合計	100%	100%	100%

表3から分かるように、イベントにぜひ来たいと考えている人はグルメフェスより音楽フェスに来たいと考えている。また、来たい・どちらかといえば来たいと考えている人は同じぐらいだった。

#### 【考察・今後の展開】

#### 9. 考察

##### 9-1 アンケート調査による考察

分析結果から、若者は諫早駅で行うイベントについて興味または関心があることが分かった。また、若者（20代）は音楽フェスについて関心があることが言える。そ

の中でも、イベントに来たいと考えている人の多くが音楽イベントで楽しみたいと考えている。また、諫早ステーションフェスティバルは音楽を通して、諫早駅を中心とした若者で活気あふれるイベントということが趣旨になっている。そのため、私たちが企画している諫早ステーションフェスティバルは若者のニーズを一番捉えているものであるといえる。

##### 9-2 「ふるさと教育」やPBLから見た考察

海外におけるPBLは、ICT学習等の過程において用いられている。それらのプロセスは①概念を明確にする。②問題を定義する。③問題を分析する。④仮説を立てる。⑤学習目標を定式化する。⑥新たな情報を調査する。⑦実行するというプロセスをふむ。一方、日本におけるPBLの実践段階は④仮説を立てるまでしか研究が進んでおらず、今回の研究は⑥と⑦のプロセスを特に重視している。この研究は日本における地域課題解決型すなわち、PBLの概念を一新させる研究であると考えている。また、「ふるさと教育」における課題解決に向けての資質・能力の育成とは、PBLにおける問題解決型学習で身に付けることができ、この研究が地域活性化の糸口になると考えている。

#### 10. 結論

諫早ステーションフェスティバルを開催するにあたって、地域で学ぶ高校生や大学生が諫早市の直面する地域課題について一緒に考え、調査し思考してきた。生徒・学生が地域課題に挑むプロジェクトとは、地域における主体的学び（アクティブラーニング）の能力を育成し、地域の一員としてその若者の強みを活かす取り組みだと考えている。また、「新幹線開通に向けての未来づくり」「若者の地域への定着」という2つの地域課題を解決するために、生徒・学生自らが、若者の出演者、企業、団体、行政に働きかけ、プロジェクトの実践（企画・交渉・運営）に主体的に取り組む、そのすべての要素を「理解する」段階までではなく、「行動し、実行・実施できる」段階になったと考えている。今回の実践研究においてPBLの学習方法を用い、生徒・学生が主体となり地域課題解決に参加することで、地域における主体として地域の未来を支えることを担う人材として資質・能力を得ることができたと考えている。

##### 11. 今後の展開

今後も高大連携をベースにイベントを継続し、音楽フェスと並行してアンケート結果にもあったように、諫早の特産品を扱ったマルシェやグルメフェスを展開し、若者のニーズに合わせたイベントを行いたいと考えている。

#### 【引用・参考文献】

註1. ふるさと教育の推進

<http://www.pref.nagasaki.jp/daedai/iplinks/2019/02/15308837.pdf?file=1/4/03230+Qar/Nvc/-/94toqaf2wCw-fE300648R/Waciz010>

註2. プロブレベースドラーニング

[https://www.gceol.jp/search/\\_icFiles/afidfile/2018/07/09/2017\\_community\\_somaxchi.pdf](https://www.gceol.jp/search/_icFiles/afidfile/2018/07/09/2017_community_somaxchi.pdf)

註3. 「主体的学び 高大接続改革」 主体的学び研究所